

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

A. コースワークの充実・強化

②分野横断的な科目群、副専攻科目群等の充実

●神戸大学国際文化学研究科

「文化情報リテラシーを駆使する専門家の養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

分野横断的な科目として、博士前期課程に「文化情報リテラシー専門演習」、「文化情報リテラシー特殊講義」を開講、これには学外から講師を招聘するだけでなく、国立民族学博物館やATR(国際電気通信研究所)での集中講義などを実施した。講義また複数の分野にまたがる博士後期課程大学院生を共同指導するプロジェクト型教育プログラムを実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学院生の専門性を維持しつつ、学際的な大学院教育を実質化するために、大学院生の関心や研究テーマを事前にリサーチした上で、担当教員に対し、本プログラムの実施委員会が講義内容などについて要請を行い、また学期末のレポートについてもプログラム実施委員会で検討を行い、次学期の講義内容の改良点を講師に要請した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

大学院生が自分の専門や以外の分野の科目を選択するケースが増加し、また学期毎に行っている研究発表会において、他分野の研究発表に対する質問を積極的に行う姿勢が見られた。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

●神戸大学国際文化学研究科

「文化情報リテラシーを駆使する専門家の養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

学際的な講義、演習と連動する形で、留学生を含む多分野（文系・理系）の大学院生が参加する集中フィールドワークを本研究科の地域連携自治体である兵庫県南あわじ市および淡路人形浄瑠璃協会の協力を受け、各年に7日間の集中共同調査および、個別の追加調査を断続的に6ヶ月間、実施した。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

学際的なフィールドワークを実施するために、調査研究を行う上で共有すべき基礎知識、および共同作業を行う上でのそれぞれの分野の基礎的な知識をいかに共有するかという点に考慮した。また、フィールドワークを行う上での現地の理解の重要性や倫理規定を遵守することについて、徹底した。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

ひとつのトピックについて、複数の研究分野を専攻する大学院生が協働で研究調査を進めるプロセスを通して、互いの研究分野の特徴についての相互理解、さらには自分の専門分野の長所と短所について自覚的になった。また、共同研究調査についてのマネージメント能力が高まった。フィールド先での発表（ポスターセッション）を通し、自らの研究成果を社会的に発信する事の重要性の理解が深まった。修士課程1年の留学生については、日本語でのアカデミックライティングのトレーニングとなり、修士論文に向けた効果的な学習となった。

1. 特に効果的であり改善に資した事例について

E. 学習・研究環境の改善

②国内外の学会発表、実習等に対する経済的支援の充実

●神戸大学国際文化学研究科

「文化情報リテラシーを駆使する専門家の養成」の事例

(具体的に何を実施したのか)

本取り組みにより、国内外の学会、シンポジウム等における大学院生の発表支援・派遣を進め、総数26件、延べ46名発表・派遣（うち海外発表17名、国内発表29名）を支援した。また、学会発表の前段階として、学内での発表会やポスターセッションを実施（プログラムに関連する学術セミナー、シンポジウムの開催（17件）セミナー、シンポジウムに合わせ、大学院生が（口頭発表・ポスター発表）総数56名発表）を行った。

(実施に当たり特に考慮・工夫したことや、注意を払ったこと)

大学院生の学会発表の質的向上、教員指導の効果的関与に配慮した。国内外の学会、シンポジウムを希望する大学院生について、事前に発表レジュメを提出させ、審査選考を行なった。また、発表原稿については、指導教員が必ず査読することとし、研究発表のレベルを高める工夫を行った。

(どのような結果が得られたのか、どのような良い影響があったのか)

取り組みの実施により、学会発表、特に海外での発表について大学院生の積極的な姿勢が顕著となると同時に、学会発表に向けた研究成果の段階的準備を演習などのカリキュラムに沿って計画的に行うなどの効果があった。こうした研究支援に対する学生の評価も高く、この延長上に人文科学系の大学院として3年間の課程修了後に50%という学位取得率につながったと考えられる。